

福音の汽車

作者 マーサーサラ 稚内バプテスト聖書教会

登場人物

サラちゃん（小学生の女の子）、靴下マン（靴下人形）

汽車のアナウンサー（声だけ）

天使（声だけ）

切符売り場の人

紙芝居掛かり

①「罪の駅、ベツレヘム駅、イエスの誕生」

サラと靴下マンが歩きながら会話をしている

サラ「ね、靴下マン、私昨日学校でテストのズルしたんだ。今心がいやな気持ちなんだー。」

靴下マン「ぼくはね、昨日お母さんに怒って、『お母さん嫌い！』と言っちゃった…お母さん泣きそうになった。それと今日お友達に嘘を沢山ついたんだー。」

サ（ためいき）「どうしたら心の痛みがなくなるのかな。」

マン「神様は許してくださるかなー」

サ「こんなにきたない心があっても、いつか天国に入れるかな？ー」

マン「きっとだめじゃないかなー、ぼくたち。」（ためいき）……（二人は駅に着く）
「あっ、罪の駅じゃん！」

二人停車駅のご案内を見る

サ「旭川駅、札幌駅…」

マン「…天国駅。…うん？！」

サ「天国駅？！？」

マン「本当に天国まで行ける汽車ってあるの？！？」

サ「めっちゃくちゃ良い人しか乗れないだろうね！」

マン（気が落ちる）「ぼくたちはだめだね。」

切符売り場の人「いいえ、誰でも乗れますよ！」

サとマン「えー！！」

マン「切符はきっと高いんじゃない？ 100億万とかさ！」

切符売り場の人「いいえ、この汽車に乗るには切符は必要ありません。」

マン「えっ！！！」

サ「へえ～～本当にそうですか？」

切符売り場の人「そうですよ。イエス様が切符をもう買ってくれたので、いつでも乗っても

良いですよ！」

サ「じゃ、乗ってみようよ！」

マン（うなずく）「そうしよう！」

アナウンサー「天国行き、福音車がまもなく発車します！」（汽笛が鳴る）

サ（汽車を見て不思議がる）「『ふ・く・い・ん・車』、、どう言う意味かな??」

マン「イエス様って誰かな？」

切符売り場の人「福音は、『良い知らせ』と言う意味ですよ。イエス様は、神様の息子です。（聖書を出してサラに渡す）はい、これを読んでください。神様のからのお手紙ですよ。読んで信じれば、天国まで案内します。それと、この汽車は色んな駅に止まって、イエス様のことを知るようになるから。ほら、急がないと置いて行かれちゃいますよ。いってらしゃい！」

サとマン「行ってきます！」

マン「さよなら！」

二人は汽車に乗る

サ「あら、運転手はいないけど!!」

マン「そうね。(ちょっと考える) まあ、前に乗ろう！」

サ「いいっか。...私も！」（二人は汽車に乗る）

汽笛がまた鳴って、汽車は発車する

マン「ポッポーオ！」

サ「出発だ!!」

（福音の汽車（曲）の音源が入る）（サラと靴下マンは後退で歌う）

福音の汽車に乗ってる 天国行きに （ポッポ!）

罪の駅から出て もう戻らない

切符はいらない 主の救いがある

それでただ行く （ポッポ!）

福音の汽車に乗ってる 天国行きに！

音源が消えて汽車のガタンゴトンの音

アナウンサー「次の駅はベツレヘム。」

サ「このお手紙読もう！（靴下マンは頭を頷く）せ・い・しょ。『はじめに神が天と地を創造した。地は形がなく、何もなかった...』」

（夜になる）電気を消して部屋を暗くする

アナウンサー「まもなく、ベツレヘム。ベツレヘムです。」

サ「ね、ここにベツレヘムの町について何か書いてあるよ！」（ミカ5章2と4節を読む）

きれいな音楽を鳴らす

マン「何か、天使の声みたい！」

サ「きれいね！」

天使の声 (ルカ 2章10-12節)「恐ることはありません。今、私はこの民全体のための素晴らしい喜びを知らせに来たのです。今日ダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。あなたがたは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます。これが、あなたがたのためのしるしです。」

マン「本当に天使だった！」

サ「見て、あっちに急に星が現れたよ！」

マン「えっ、どこ？！(見る) あ、本当だ、星だ！」

イエスの誕生（紙芝居）

②「ガリラヤ湖の駅、イエスの奇跡」

（次の朝）（ガタンゴトンの音）

マン（あくび）「あー、朝になったー」

サ（あくび）「イエス様の誕生、すごかったね！」

マン「ね！次はどこかな？？」

汽笛が鳴る

アナウンサー「次の駅は、ガリラヤ湖」

マン「その生まれた赤ちゃんイエス様は大人になったら、どんなことするのかな？」

サ「あ、湖見えてきた！」

マン「本当だ！」

アナウンサー「まもなく、ガリラヤ湖駅。」

汽車のブレーキの音、強い風の音

マン「うわ～～、嵐だ！」

サ「風も強いし、湖の波高いね！」

マン「ね！あそこに船ある！」

サ「船に乗ってる人たちは大変だ！」

マン「ねね、誰かが水の上を歩いてるよ！」

サ「本当だ！船まで行こうとしてるみたい。誰、その人！？！...あ、そして今もう一人が船から出て、さっきの人をお迎えに行ってる！」（船に向かって叫ぶ）「あぶないよ！！」

マン「ああ、しずんでる！」（船に向かって叫ぶ）「頑張れ！もう少しだ！」

サ「あっ、二人は無事に船に乗れた見たいよ！」

マン「良かった！」

急に風の音がおさまって、シーンとなる

びっくりした顔で、お互いを見る

マン（ヒソヒソと言う）「ね、、、止まった。。。」

サ「波も落ち着いた...嵐がさっきまであったように全然見えないわ。」

マン「最初にさ、水の上に歩いてた人がやったと思わない？ もしさ、水の上に歩けるなら…？」

サ「いったいどんな人なの？風も波も従うその人は！？」

マン「あ、、聖書を見よう！」

聖書を出して読み始める

サ「…その人、イエス様だ。」（靴下マンびっくりした顔）

イエス様の奇跡（紙芝居）（マタイ14章による）

③「カルバリ駅、イエスの死」

ガタンゴトンの音

マン「次の駅はどこかな？イエス様はまた奇跡をするのかな？」

アナウンサー「次の駅は、カルバリ。」

サ（イエス様の色々について聖書を読んでいるふり）「このイエス様、すごいね！人の病気を癒したり、神様のことを人に教えたり、色んな奇跡をしてたり。」

マン「うん、すごいこと沢山したね、イエス様。」

サ（ゆっくり言う）「優しい人だね。ペテロさんもみんなも助けてくれて...私たちの汽車の切符も買ってくれたし。」

マン（頷く）「うん。」

サ「イエス様は、本当に神様の息子なのかな。イエス様は、神様のことをお話しするとき、神様のことを「父」とよぶるね。「私が道であり、真理であり、命なのです。私を通して出なければ、誰も父のみもとに来ることはありません。」

マン「イエス様は、「わたしと父は一つです」と言ったね。」

サ「それだったら、イエスは神様ってということ？」

マン「さあ...」

アナウンサー「まもなく、カルバリ駅。カルバリです。」

マン「ね、今何時？」

サ「昼3時ぐらいかな」

電気を消す

急なブレーキの音

サ「キャー！」

マン「まっくらだ、怖い！」

サ「何か、急に世界の光が消された感じ…」

電気をつける

サ「ああ、やっとまた明るくなってきた、良かった！」

マン「世界の終わりだと思っちゃった！」

サ「あっ、カルバリ駅に着いた見たいね。ね、向こうの山見て。その上にあるのは何？」

マン「十字架見たい…十字架の上につけられてる人たちがいる…かわいそうに…」

サ「見るのは何か苦しい気持ちするけど、中々そこから目を離せない」

マン「ぼくも。」

サ（やっと十字架から目を離すと）「聖書読もう。もしかしたら誰が十字架にいるのは、分かるかもしれない。」(聖書を開いて読みはじめる)

十字架のお話し （紙芝居）

④「空っぽのお墓、イエス様の復活、イエスを信じる決定、天国駅」

サ「イエス様は何の悪いこともしてないのに、十字架で死んじゃったのは、悲しい………」

マン「世界のすべての人の罪のために死んだと聖書が書いてあったね。」

サ「じゃ、私たちのためにも死んだことか…（悲しく）私のズル。」

マン「ぼくの嘘つきも。」

サ「あっ、どうしよう…私たちの代わりに死んでくださったイエス様！…」

アナウンサー「汽車はまもなく発信します。次はイエス様のお墓です。」

サ「お墓！え～～？！？悲しすぎ～…」

マン「お墓に行くのは怖い！」

サ「じゃ、ここで汽車から降りる？」

マン「ううん。やだ。」

「サ「じゃさ、どうしたいの？」

マン「続けて乗りたい。」

サ「私も。」

汽笛が鳴る、発車の音

二人はボーっとして考えて、バックで音楽とかながす

マン（ためいき）「次の駅はまだかな？！」

サ「ずっとイエス様のことを考えてた。」

マン「僕もさ。」

アナウンサー「まもなくイエスのお墓に止まります。」

マン「やっと！」

汽車が到着したら、二人汽車から降りる

サ「どこ、ここ?!」

マン「駅じゃないじゃん!」

サ（汽車のすぐ手前に崖があると気づく）「あーあ!」（地面に落ちる）

マン（二人は崖に近寄って、下の谷を見る）「世界の終わりだ…」

サ「線路はここで急に終わって…」

マン「どうしてここに崖あるの?!…」

サラは振り返ると、墓のことを気づく

サ「そう言えば、あれ(指でさす)がイエス様のお墓??ドウクツみたい!」

二人は洞窟に近寄る

マン「うわっ、、待って!その中からだを見つけたら?…怖い!」

サ「行こうよ!」（無理やり靴下マンを引っぱって一緒に連れて行く）

マン「あ、、誰もいない!」

サ「誰もいない!・・・と言うのは、これがイエス様のお墓で、今は空っぽなら…」

マン「もしかしたら…?」

サ「もしかすると!」

マン「…聖書!!」

二人は汽車まで走る

サ（聖書を出して、必死にお話しを探す）「ねね、聞いて、聞いて!お話し見つけた!イエス様が死んだ三日後、イエス様のお友達がお墓に来て、私たちみたいに空っぽのお墓を見つけて、天使が二人来て、天使がこう言ったんだー「あなたがたは、なぜ生きている方を死人の中で探すのですか。ここにはおられません。よみがえられたのです。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出しなさい。人の子は必ず罪人らの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえらなければならない、と言われたでしょう。」（聖書から目を離して、感動で目が希望で輝く）「イエス様はよみがえって、死んだままで終わらなかったんだ!」

マン「イエス様は今でも生きているんだ!」

サ「私は今イエス様が本当に神様だと信じる!!イエス様は私のために十字架で死んでまた死からよみがえったことを信じます!

マン「靴下マンも!」

サ（上を向いて）「神様、イエスさまが私のためにしてくれたことをありがとうございます!私のきたない心をキレイにして許してください!ありがとうございます!」（一回サラそのまま凍る）

（靴下マンは下を見ながら、まよっている。自分の中にある思いを言う）「ぼくも心をキレイにして欲しいけど、イエス様は私を許してくださるかな? ぼくはこれから神様をちゃんと従うことができるかわからない…頑張っても、足りなかったら…」

サ「ね、この谷の向こう側に、素敵な町が輝いてる!汽車に乗ろうよ!」

マン「汽車がこの谷を乗り越えるのはありえないじゃん！」

サ「いや、イエス様が私たちのためにこの汽車の切符を買ってくれたなら、必ず天国まで無事で行けるはずでしょう？きっと私たちが見えない橋でこの谷を渡るんだよ！私は乗る！イエス様に頼って！」

マン（もう一回サラそのまま凍って、靴下マンは自分と相談する）「イエス様に信頼する…うん、ぼくは、ぜったいにこの深い谷を一人では渡れないし…イエス様が私のために汽車の切符を買えるため自分の命を捨てたよね。そして生きかえたんだから、神様の力があるんだよね。あ、わかった！イエス様が私を完全に助けれることができるんだ！私は汽車に乗るだけでいいのか！神様、ぼくはイエス様に信じ頼ります！一人でどれだけ頑張っても自分の心をキレイにできない。天国にも行けない。神様、どうかこの靴下マンの心もキレイにして、ぼくの罪をすべて許して天国に入らせてください！ありがとう！あ、なんかワクワクする！」

サ「靴下マンも乗るよね??」

マン「もちろん！行こう！」

サ「私たち、福音の汽車に乗ります！」

アナウンサー「次の駅は終着点、天国駅！」

音楽をながしながら、福音の汽車は空を飛んで谷を越える

サ「うわ〜〜い！汽車が空を飛んでる！」

マン「ぼくたちが空を飛んでる！！かがやく町へ！」

アナウンサー「まもなく、終着点。天国です！」

汽笛が到着する音、天国に到着

サとマン「天国だ！」「あ、(びっくりした顔でお互いを見る) イエス様！！」（前を見て手を振る）

最後に、子供さんびかを子供たちにくばって、
みんなで福音の汽車の曲を歌って終わります

[終わり]